北九州市の文化財を守る会
会　報

No. 64.　63. 8. 1
発行　北九州市の文化財を守る会
北九州市小倉北区鍛冶町一丁目7－2
森鷗外旧居内
電話（093)531-1604
印刷　博文堂印刷所
北九州市小倉北区長浜町2－22
電話（093)511-1011

(1) 北九州市の文化財を守る会会報

北九州市の文化財を守る会
会　報

No.1　46. 2. 25
年3回発刊
発行　北九州市の文化財を守る会
北九州市八幡区西本町3丁目6番1号
北九州市教育委員会文化課内
電話（代表）093－68－4931

北九州市の文

北九州市における、文化財愛護のための市民運動の新しい原点となることを目指して、「北九州市の文化財を守る会」が発足した。

第一回の総会を兼ねた発会式が去る一月十六日午後二時から、小倉区田町の「ひびき荘」で開かれた。この発会式には、会員一五〇名が出席したほか、谷北九州市長、杉原県教育委員会文化課長、春永県議会文化財愛護議員連盟会長などの来賓を迎え、盛大な会となった。

盛大に開かれた発会式

まず、発起人代会結成にように報本会結十五年一財指導者この講郷土史に究家をは管理者ま関係者を員会と紹開いたも文化財のにすすめその結ただ行政かりではして展開果は期待らの提案この発を守る会者全員のその後が盛り上発起人会たれた。

右は会報第1号の巻頭部分です。

「文化財を守る会」の誕生

会長　小林安司

本「北九州市の文化財を守る会」が誕生したのは、去る昭和四十六年一月のことで、市庁舎がまだ戸畑に、教育委員会が八幡にあった頃であった。

何分にも、区を超えて、研究者・関係団体を全市打って一丸とする文化財関係の市民団体が初めて産まれたのである。

さきに北九州市がスタートしたのは、これより七年前で、新市は新しい都市づくりを目指して着々と施策を進めてきたが、その文化政策の一つに文化財行政の推進があった。

思へば、戦争で荒廃したままの文化財を保護し、新たな開発の波から歴史遺産を防御することが、当時の本市にとっても緊急の課題となってきていた。心ある市民間の与論もあって、教育委員会は文化財保護体制を樹立するため、先づ初めに市内所在の考古、文書、民俗の調査にとりかかると共に、新たに「文化財保護条例」を制定し、文化財の「市指定」の措置をはかるようになった。

市では従来、市内にある各種の歴史的な文化遺産を市民に周知させるために、「北九州市文化財展」、「北九州藩政文化展」などを昭和四十三年から年々開催して、広く市民への啓蒙につとめてきた。市が小倉城の天守閣に「北九州市立郷土資料館」を開設したのも本会発足の昭和四十六年であった。これは古代から近代までの郷土の歴史と文化を紹介して、北九州市という産業都市の基盤にある伝統文化の理解を高めていくもので、時期として本会誕生と相呼応するものであったことに注目したい。

私はかねて本会創設の意義を再確認したいと考えていたので今回、本紙面をかりて少しく往時を回顧してみることにした。ただ記憶が定かでなく心許無い次第のため、幸い昭和四十六年二月二十五日付発行になる本会の「会報」第一号によって以下、本会の発会にいた

長門　山田時文撰、福間家臣佐々木之清謹書とある。

註(1)、門司市編入当時の大里町誌にも、『製粉会社構内の笠松の傍に福間松あり樹下の年ふる石碑・・福間の主孫之を創立』とある。

(2) 大正十一年（一九二二）頃、この福間松の碑は、近くの小森江海岸一本松の傍に移されている。

(3) 昭和十五年（一九四〇）頃、この碑は更に移されて、大里町一丁目の西山浄土宗、柳浦山、西生寺境内に現存す。

(4) 「この福間松のいわれ」は、寛保元年八月の福間舎人政明の譜録を元にしている。

福　間　松　（碑文）

福間松、在豊大里濱、圍其所以得名、福間元明君者藝人清和帝之裔也。国兄邑于紀、福万遂氏焉。後万更間。君年十六始仕洞春公、為警御也。勇捷善戰、永禄癸亥雲白鹿城之役、藝兵穿為地道、城中亦穿地横截之。君先入其中、檀投油炬照道而前、忽見一人、容貌魂偉自称身白久盛邁戰、君進交槍刺而斃焉。於是衆乘勝前城陥。己巳周茶臼山之役、君騎先亂川斬大将大内輝弘。天正丙子圍田氏兵圍援本願寺、寺中食乏、等、どしどし御投稿願います。なほ原稿用紙は、十五字（縦の

君躍入敵船撃斃数十百人遂得輸焉。是歳備阿部川拘山中鹿介圍素圍遁日彼深處殪焉。丙戌豊王征伐九州、天樹公発兵援之陣于長赤馬関越八月三十六日命某氏者先渡于豊。君監其軍、在前船達于大里濱。敵之伏起某氏圍驚遁而逃、君奮然以為此吾效節授命日也。上濱挑戰有一勇士相前槍投、君鈎而倒之。既而扶起縦之以賈餘勇。無敢近者忽中鳥銃終焉。年四十八。留士爽骸埋松以為表矣。土人因呼曰福間松云。君従初臨戰至此功之大者田三。囲獲皆勁敵、事蹟詳干簡策。天明□丑二百年祀、八世孫政幸君來弔於此、松子数枚歸。後建祠第中蔵之為主追盛慎幹明神其嗣政方君今此樹石碣誌先勲。又政幸君之志云。文化丙寅秋八月。

長門　山田時文撰。
福間家臣佐々木之清謹書。

註、碑文の文字消滅甚しく目下研究中、□印の文字は推定。

会からのお知らせ

先般の理事会に於て、本会の一層の発展と、活性を図る為、左の委員会を設け、試行的に実施することを決めました。

企画委員会
講演会　映写会、研究会　見学等の年間行事を企図する。

編集委員会
今まで会報は各支部持廻りで記事集めから編集までしていましたが、今回から皆様の会報として一層親しみあるものにする念願で、全会員から自由に投稿して頂き、委員会で編集することになりました。文化財に関する研究、調査報告、紹介、随想、意見、写真

字数で用紙の十五字目の下に横線を引いておくと便利です）行数は制限がありません。

日時は出来次第でいつでも結構で事務局宛御送付下さい。

各委員は差当り左の方々にお願いしました、任期は一年です。

◎委員長　○副委員長

企画委員会
餘戸義雄　◎吉岡成夫
福田安敏　平木清二郎
藤田敏夫　○能美安男
佐野隼人

編集委員会
是則宗興　○吉田美知子
◎福田安敏　黒野　肇
政時義明　森川政美
中尾多聞

特別展『北九州の中国陶磁』のご案内
―出土品にみる古代の日中交流―

1. 場　所　北九州市立考古博物館
〒803　北九州市小倉北区金田一丁目1番3号
TEL○九三（五九二）三一九六
2. 期　間　昭和63年8月2日(火)～9月28日(水)
※ 休館日　日曜日、祝日
3. 観覧料　大人　二〇〇円　団体　一五〇円
小人　一〇〇円　団体　五〇円（団体は三〇名以上）
4. 主な展示品
【国宝】唐三彩長頸壷（福岡・沖ノ島祭祀跡）【重文】青磁鍑（太宰府市）
【重文】銅製経筒・陶製経筒（豊前市・求菩提山経塚）、青磁碗（福岡市・鴻臚館跡）　市内の出土品【市指定】青白磁壷・褐釉陶製水注（若松区・椎木山遺跡）褐釉双耳壷・陶製五輪塔（八幡西区・白岩西遺跡）、白磁碗・石帯（小倉北区・愛宕遺跡）など約五〇〇点

【重文】青磁鍑

事務局だより

▽新しいスタイルでとにかく第一歩を踏み出しました。色々と試行錯誤はあるかと思いますが皆さまのお協力をお願いします。

▽北九州市基本構想審議会の「基本構想を考える市民のつどい」に会から5月13日八幡西区門司宣里氏5月17日小倉北区石崎徳太郎氏が出席しました。

▽北九州市市立図書館協議会委員に門司区吉岡成夫氏を会として推せんしました。

（63・8・1～65・7・31）

る経緯、本会発会式の模様をまずたどってみることにした。

――――――

それによると、本会の第一回総会を兼ねた発会式は一月十六日午后二時から小倉区田町の「ひびき荘」で開かれた。

発会式には会員百五十名が出席して、谷北九州市長、杉原県教育委員会文化課長、春永県会文化財愛護議員運営会長らの来賓を迎えて開会して、まず本会の結成準備委員会の発起人代表である劉寒吉氏が本会結成にいたるまでの経過を報告した。

その報告では、本会結成のきっかけは、前年一月に開催の「文化財指導者講習会」にさかのぼるもので、〈文化財の保護はただ行政的な措置や対策に待つばかりでなく、広範な市民運動として展開するのでなければ、その効果が期待できない〉という参加者の間からの適切な提案もあり、この発案により本会結成の申し合せが参加者全員の賛同を得て行われたのであった。

その後、各区とも気運が盛りあがり、四月に第一回の発起人会が市立小倉図書館で持たれた。その時に集った発起人のメンバーは左の通りとなっている。

まず各区の郷土会関係者や学校関係者の代表者。

次に、文化財調査委員、文化財関係団体、文化財所有者。

なお、オブザーバーとして市教育委員会文化課と各区の市立図書館の代表者。

この発起人会が母胎となって、やがて結成準備委員会が正式に発足して事務局を文化課に置き（先年まで世話になる）、まず会員募集にとりかかることになった。

「会報」によると、この会員募集の呼びかけは、組織を通じ、あるいはマン・ツウ・マンで、あらゆる機会に広く行われた。しかし文化財に関する市民の関心は必ずしも高いとは言えず、会員申込は遅々として伸び悩んだ模様。しかし、やがて希望者は次第に増加して、発会式当日までには三百数十名を教えるにいたったという。

さて、この劉氏の報告の後に、役員の選出があり、新しく会長に選出された菊池安右衛門氏の役員を代表しての挨拶があり、その後、会則の承認、会の事務報告が小林安司副会長によって発表され、会の事業計画としては、四十五年度が僅か三カ月のため、一月の発会式記念の特別講演会、二月に機関紙の発行、三月に門司、小倉区内の文化財巡りを実施することなどの決定をみた。

「会報」には、会は終始、和やかな中にも真剣な雰囲気の中で進められとあり、総会のあと九州大学の谷口鉄雄教授により「北九州の文化財」と題して、市内にある県指定文化財の「貫権現」と「法円寺」の梵鐘に関する有意義な講演がなされた。

以上「会報」によって、発会までと、発会式の模様をそのままに紹介を試みたのであるが、「開発か保存か」という今日の最も社会的緊急な、そして困難な課題について、会員のひとりひとりが真剣に取り組まなければ、郷土の文化財は守れないという決意も新たに、我が「北九州市の文化財を守る会」がスタートしたのであると、「会報」の文章は力強く結ばれているのであった。

なお同会報には、発会を祝して寄せられた菊池会長による「ご挨拶」のなかにも

「この市民運動は、池に投げ込まれた小石の波紋が次第に広がり、やがて池全体を覆うような運動でなければならない」と訴え、

劉寒吉氏もまた「文化財を守る会の発足に寄せて」と題して

「市に文化財を保護する条例もあり、近く郷土資料館も誕生することになっていて、一応そういうことで文化財の保護が出来るように見えるが、それはあくまでも一応のところで、実際は日々急速に文化財は衰亡、消失、破壊されつつある現状で、こういう時に「北九州市の文化財を守る会」が生まれたのは、実に良い時期に生まれたものと、ありがたく思っています。」

と述べている。

思うに我が「北九州市の文化財を守る会」が誕生してここに十八年、「会報」も号を重ねること六十四回の今日、今こそしっかりと本会創設の原点に立ち返ると共に、年輪に刻まれた本会の活動に改めて敬意を表したい。

豊前善光寺とそれに関連した話

戸畑区 福田 安敏

昭和六三年度のバスによる文化財の探訪は予定通り六月五日（日）に実施しました。珍しくおだやかな晴天にめぐまれ、予定の時間通りに各処を廻ることが出来たのは幸でした。前会長の加瀬さんも参加されましたが、年々参加者の減少で、何とかしなければならない段階に来ているようです。

探訪した個所は前号の募集の項で記したように、豊前善光寺、国東半島の真玉地区の応歴寺、無動寺で、いづれも初めて、と云ふ人が多く、満足の様子でした。

講師に宇佐市教育員会の埋蔵文化財調査技師の小倉正吾さんにお願いしました。氏は本市の考古博物館々長をされていた小田富士雄先生の教え子だったそうです。

さて豊前善光寺のことですが、近くに東光寺の五百羅漢があり、そちらには観光バスがよく行きますが善光寺には廻っていないとのことです。

本寺は一般に芝浦の善光寺と呼ばれ、信州（長野）、甲州（山梨）のそれと共に日本三善寺の一つとされている。開基は平安中期、天徳二年（九五八年）光勝空也上人（醍醐天皇の第二皇子）と云はれています。初は天台宗、のち時宗となり、今は浄土宗となっています。本堂（金堂）明治四十年に国の重要文化財に指定されています。正面は五間、側面は七間で、寄棟造、本瓦葺、妻入、向唐破風つき向拝を設けている。内陣、外陣に分れ、所々に禅宗様が見られる。寺伝では、建長二年（一二五〇）の建立と云はれるが、専門家によっては少し時代が降るが室町時代以前であることはたしかだ、と云はれているそうである。

この項はこゝに祭られている本尊についての話です。

こゝの本尊が最近盗まれたことを、うすうす聞いていました。

本堂の内陣には阿弥陀如来の半

身像が提げてあるだけで、その後に本尊がまつられてあった筈です。

宇佐神宮駐車場で中食時間の時小倉君にそのことを聞いて見ますと（住職は当日不在でした。）

盗まれたことは事実ですが、どんな仏像であったか全然分らないという返事だったそうです。まるでとぼけたような話ですが、私はふと思い当ることがありました。

本家ともいうべき長野の善光寺の本尊は現在は絶対の秘仏として寺僧も、仏教専門の学者も見ることが出来ないそうです。然し、昔、それを写した形が残り、所々善光寺系の寺々にそれ等が流布し全国的に数多く残されているとのことです。そしてそれら各寺が秘仏として、見せないか、或は何年に一度開扉するか個々には分らないが、こゝ豊前善光寺も秘仏としてあつかい、或は住職は見たことがあっていても、見たことがないようにとぼけたような返事をしたことかも知れない。

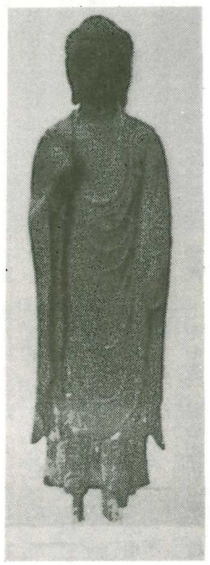
こゝで一寸横道にそれて秘仏について述べて見ましょう。大体仏像は礼拝の対称として作られたものです。それを見せないというのはどんな理由か、私もそれに気付いたのは初めてゞ、宗教上の教義からくるのか、ただ神秘化するためか、今後の研究の課題として残しておくことにしました。長野の善光寺の像は絶体に開帳されないし、近くでは岡垣町の海蔵寺の馬頭観音（県文化財指定）は年一回、二月十八日に開帳、元は何年に一回だったのを、信者のたっての願ひで、毎年になったそうです。

有名な奈良の法隆寺、夢殿の救世観音は長らく秘仏として納められていたのを、明治期来朝した米国のフェロノサ（美術史家）が岡倉天心と共に法隆寺の住職を口どき落してそれを開かせたということです。包まれた白布を取りのぞいて、現れた観音像を見て、岡倉天心は「私は未だこれを見てない人達をうらやましく思ふ」とその感激の強かったことを語っています。

話を元に戻して、善光寺式阿弥陀如来の造形上の徴について述べることにします。

勿論本家の長野善光寺のものは分からないが、それを模して作られた幾多の作品から、標準的な形式が分かっています。

㈠ 光背か各尊像に別々に造られたものでなく、一つであること、指定されました。光背や両脇侍台座を欠いでいますが、十四世紀頃の作と推定され貴重な現存物といえるでしょう。



㈡ 三尊共直立していること。

㈢ 阿弥陀は、その頭髪が、螺髪でなく縄状になっていること。

㈣ 右手は胸の高さに挙げ、前方に出して掌を前に向けて各指を軽くまげている。左手は下におろし、指は刀印を結ぶ。

㈤ 衲衣は通肩で胸を広く現している。

㈥ 両脇侍像は共に垂髪を結び、天冠台をつけている。そして手は腹の所で左の掌を上に向け、右の掌をその上に伏せて重ねる。

㈦ 像高は、甲州の善光寺のものは本尊が一四七、二センチ　両脇侍は九五、五センチと大きい方ですが、大部分は六〇センチ前後の小さなものゝようです。又材質は青銅で出来ています。

写真のものは当市小倉南区葛原の紫雲山称名院にあるもので文化財保護審議委員の錦織先生が調査され、昭和五四年に市の文化財に指定されました。光背や両脇侍台座を欠いでいますが、十四世紀頃の作と推定され貴重な現存物といえるでしょう。

総高五〇、四センチ

以上でこの項を終ることにします。

附記

この原稿を書き終えて二日経った七月六日、私の友人で、豊前善光寺に関係の深い信者のN氏に道で会いました。早速盗難の件を聞きました所、六体盗まれていたらしく、この頃無事寺に返った、とのことでした。本人が急いでいたので、そのいきさつは聞けませんでしたが、秘仏として本尊があつかわれているかどうかを尋ねますと、やはり秘物扱いになっているそうで、自分は見たことがあると、手で大きさを示されましたが、大体五、六〇センチ位の小さなものとの答えでした。とにかく無事返って来てよかったと思いました。

以上

鷲峰山大興善寺とその文化財

小倉南区 中尾 多聞

鷲峰山大興善寺は小倉南区蒲生二丁目鷲峰山のふもとにあり、境内地約三千坪（一ヘクタール）の霊域である。創立は寛元三年（一二四六）である。開基（創立した人）は北条時頼で、直接造営に当ったのは佐野源左衛門尉常世である。叡尊（興聖菩薩と称する）を請して開山の祖となしている。南都（奈良）西大寺の末寺で十八大刹の一である。中央に講堂・本堂があり。本堂の本尊仏は釈迦像である。この釈迦像は京都の嵯峨の清涼寺の仏像と同じ系統で、一般に清涼寺系仏像とよばれている。像の高さ一八七糎、製作は室町時代のものである。現在文化財の指定を受けている。本堂の左に講堂があり、この本尊は如意輪観世音菩薩である。この如意輪像については後述する。次に三重の塔があってその傍に放生池がある。また、

本堂の北に方丈（住職の居室）・雲厨（庫裡）があり、方丈の後ろに築山をつくり、その他経蔵・鐘楼・伽藍堂・僧寮・浴室・山門及び遊廊その他諸堂がならび山門の上に四天（東方持国天・西方広目天・南方増長天・北方多聞天＝仏法守護の神）を安置し。下に二金剛（現存、鎌倉時代作。県指定文化財）を祀る。門外に池があり、紫の池という。池中に一島を築き、前に紅橋を架し、上に弁天を祀る。また本堂の後ろの山の中途に春日大明神を祀る。今はこの所を春日谷と呼んでいる。その下に荒神・貴船の二つの祠をつくっている。また寺の南を花園といい、こゝに最明寺殿北条時頼の墓を祀っている。（現存）その他、末寺として、東福寺・浄土院・観音寺等五十四院が本寺をかこんで建っていた。また、この森の中に八幡大神の祠を建て、これをこの大興善寺の鎮守とした。また寺の南に佐野常世の居館のあった所があり、現在の蒲生である。このあたりは現在も佐野姓が多い。

創設後八十四年暦応の初め（一三三八）玄海律師（当時は律宗であった）が住持となり最盛期であった。大比丘衆三十八員、その他の僧徒百有余人、この間、物部武村・物部武直（共に厚東氏）大内義弘・足利義教（足利六代将軍）等の荘園寄贈あり、元亀四年（一五七四）当国領主高橋三河守鑑種が小熊野村（現在熊谷町）の古屋（現在古谷姓）氏に命じ釈迦像を修理させた。（体内に記録あり、県指定文化財）

天正年間（一五七四～一五九二）大友の兵火にかゝり、寺は焼失し大小の子院も皆灰尽に帰し、僧徒も散逸して寺領は豪族の所有となり、寺室も焼失した。たゞ釈迦像・如意輪像及び二金剛のみは焼失をまぬがれた。

慶長の初め（一五九六）村人が相寄って一尊堂を建て、東雲寺の僧門室玄普を住せしめた（これより律を改め禅となる。承応の初め（一六五二）住持玄祝自ら募金して一堂を建て釈迦像を奉安し、二金剛門を造り、二金剛像の修復を試みた。その時永貞院大姉（小笠原氏）がその家臣沖族斉居士に寄金を托して造営のことを命じさせた寛文十一年（一六七一）起工して数月を歴て完成し、仏殿・方丈・二金剛門・弁天堂等を再建した。この時如意輪像中に足利六代将軍義輝公の釣帖一巻と、また仏頭の中に古い錦の袋があり、中に古い香合がつゝまれており、その中に仏舎利（仏の骨と称する宝石の一種五個（現存三個）を入れていた像中の記録によると、玄海律師が供養していたもので唐国の育王塔中から分けたものであり。歴代の小笠原氏の尊崇厚く、元録三年、小笠原忠雄公の命令で仏殿の右に新たに舎利殿（九尺四方）を創り寺は次第に隆盛になったが、昔日の最盛時に較べて十分の一か二に及ばないが、それでもこの地方の大刹であった。

その後、明治維新の際、長州との戦いで小笠原氏の本陣となり、兵火の災にあって焼失し、その後再建したが、明治三十年代に再び火災にかかり焼失した。しかし、山門・舎利殿・仏舎利・二金剛・釈迦像・如意輪像は焼失をまぬがれて現存している。現在の住職は曹洞宗（禅）になってから二十二代目である。以上大興善寺の縁起について略述したが、こゝで大興善寺の仏像について述べてみる。

金剛力士像は鎌倉期のもので、昭和四十五年、県・市の補助をうけ、過去の粗雑な修理を再修理して鎌倉期の形体に復元した。容姿雄渾にして鎌倉期の特徴をよくあらわしている。（作者不詳）

釈迦像は清涼寺系の仏像で、その衣紋のひだは飜波式のうるわしい形を示しているが、残念ながら頭部は後代の補修である。前述の二金剛と共に、県より文化財の指定を受けている。

如意輪像については、山口県の自住寺の縁起によれば長門の国の厚東氏（物部武村・武直）が大興善寺に寄進したということで、従ってこの仏像は南北朝時代の制作である。背部に墨書銘文あり、眼は玉眼（ガラス玉）で頭内に仏舎利が納められていたこと、当時の長老が、前述の玄海律師であったことも判明した。作者は「大仏師法印幸誉・法橋幸尊・備前公幸為・暦応三年庚辰二月八日右筆沙門了恵」とあることにより、幸誉・幸尊・幸為の三人が作者と考えられる。この三人については、鎌倉期の湛慶の五代の孫に康誉・康尊・康為があり。この人達と同一人物か否かの検討が、作品比較によって行われ、現在では同一人物であるとの結論がでている。

若松区藤木白山神社 宮司大藤家古文書

若松区　森川政美

本文の概略

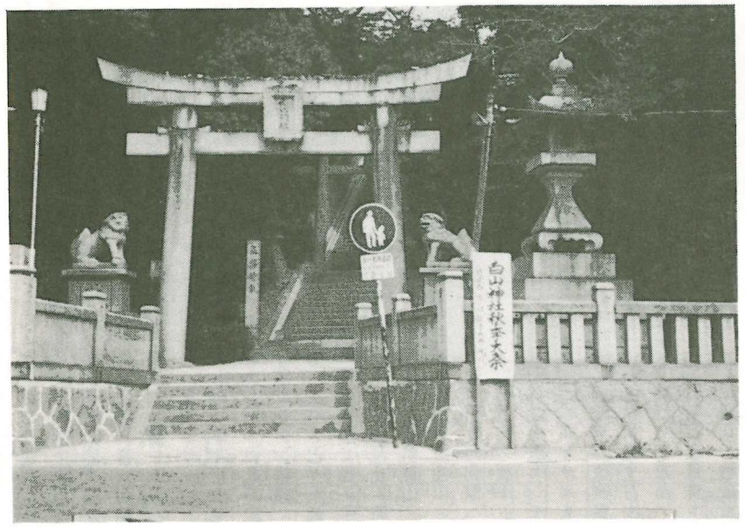
世は麻のごとく乱れた戦国時代当時東国屈指の勇将、伊豆小田原の城主北条氏綱の家臣であった大藤左京亮は、永楽銭五百貫の采地を領していた。処が佞臣のそねみにかゝり主君氏綱の勘気に合ふ処となり、天文五年（一五七七）伊豆の国府を出奔、左京亮は旅から旅を重ねて西下、京都、広島を経て周防山口にたどり着き、山口の大守大内義隆の家臣になる事が出来た。だが喜びも柄の間、大内家の重臣陶尾張守晴賢の謀反のため、天文二十年（一五五一）大内義隆は自殺、遂に大内家は亡びた。

左京亮は又もや浪々の身となり、天文二十一年山口を出て、下関より船路で若松浦に漂着、藤木村（当時は山鹿庄山本村）藤の本に住いをする事となった。

左京亮は田畠を開き慈悲深く諸人を憐れんだので村民も親のごとくなつき、終に此の地の長となり弘治三年（一五五七）夏の頃左京亮年八十三歳の高令で藤の本に没した。

後の人、その徳を偲び墓を建て大藤塚と呼んだ。左京亮の嫡子は太郎左衛門武貞と言い温順で村民との交りも良く家門も栄えたが、三代目の五郎右衛門武直の代に至り、田畠山林を売払い明日炊く

米も無い状態となった。村民見るにみかねて童子丸、神の本にある女躰権現の神主に武直を取り立てた。その後子孫代々白山神社の神職を受け継ぎ今の代に至った。…



本文

楽銭五百貫（五百貫ハ今ノ世ノ五千石ニ相當セリ）ノ采地ヲ與ヘラル武継次第ニ立身出世シテ後ハ北條家棟梁ノ忠臣ト成タレトモ怨ムラクハ世ノ習トシテ自カラ佞臣ノ讒口ニカタリ主君氏綱ノ御意ニ叶ハス終ニ勘気ノ身トソ成ニケル

（此事ハ北條盛衰家譜ト云モノニ見ヘタリ亦北條盛衰記ナト云物ニモ左京亮ノ行跡来由ヲ記セシトモ其事精シカラスシテ齟齬スル事有開キ見テ知ルヘシ）去ハ佞臣ニ朝ニアル時ハ賢臣モ蔭ヲ陰スルトカヤ唐土ニテモ楚ノ屈原トイヘルハ賢人ナレトモ佞人ノ讒ニ依テ無實ノ罪ニ落入楚王ニ見放サレテ洞羅大河ニ身ヲ投シ事梵辞ト云書ニ委シク見エタリ又皇ラ御国ニ於テモ昔菅原道實卿ハ才徳美ニシテ然モ延喜帝ノ叡慮ニ叶ヒ君ノ御師範トマテ成玉ヒ其身三公（三公ハ正従一位大政大臣左右ー大臣ヲ云ナリ）ニ昇リヨハシテ時ノ聖人ト仰カレシ人ト成シカトモ其才徳ヲ悪テ藤原時平卿一味原ノ佞人讒ヲ構ヘ君ニ申上テ道實卿ヲ無實ノ罪ニ沈メ筑紫大宰権ノ師ニ左遷セラレ玉ヒシ事世ノ人ノ知レル処ニシテ是昔モ今モ佞人是ヲ悪シ美女ハ悪女ノ敵トカヤ世俗ノ諺ニモ云ルト如ク大和漢國ト國ハ隔ツレトモ古今ノ間斯ノ如ク人情ノ習トシテ惜ムラクハ氏綱ノ忠臣大藤左京亮武継モ思ハサリシニ佞人ノ讒舌ニ落入無實ノ難ニ沈ミテ浪々ノ身ト成ヨリ住馴シ伊豆ノ國府父母ー家路ヲ立出テ今ヲ限リト顧ミツヤ思ハヌ旅ニ立出ケル心ノ中ハ如何ナラント人々袖ヲ絞リケル此時氏綱ハ武州河越ノ城主上杉朝定ト度々合戦有リシカ朝定カ運ヤ傾キケン朝定終ニ氏綱ニ攻落サレテ氏綱ノ領地ト河越ノ城ハ以来氏綱ノ子氏康ノ入無實ノ難ニ沈ミテ浪々ノ身ト成ヌルモ君名如何センスヘナリ先祖ヨリ住馴シ伊豆ノ國府父母ー家路ヲ立出テ今ヲ限リト顧ミツヤ思ハヌ旅ニ立出ケル心ノ中ハ如何ナラント人々袖ヲ絞リケル此時氏綱ハ武州河越ノ城主上杉朝定ト度々合戦有リシカ朝定カ運ヤ傾キケン朝定終ニ氏綱ニ攻落サレテ氏綱ノ領地ト河越ノ城ハ以来氏綱ノ子氏康ノ入無實ノ難ニ沈ミテ浪々ノ身ト成ヌルモ君名如何センスヘナリ先祖ヨリ住馴シ伊豆ノ國府父母ー家路ヲ立出テ今ヲ限リト顧ミツヤ思ハヌ旅ニ立出ケル心ノ中ハ如何ナラフレハ味方ハ十分一ノ軍兵ナルモ輙リ勝利ヲ得タルワ偏ニ左衛門大夫カ良策ニヨレリ是ニ依テ憲政□憤猶止ミカタク如何ニモシテ氏康ヲ計亡サント牙ヲ噛テ昼夜工夫ヲ回ラシケル様々謀計ヲメクラシテ度々押寄タレトモ一度トシテ勝利ナケレハ只士卒ヲ損亡スルノミニテ氏康ニハ次第ニ味方勢勝リテ武威誠ニ旭ノ昇リ玉フカ如ク諸軍靡キ随ヒテ後ハ数萬騎ト成リ茲ニ以前ノ恥辱ヲ雪カント様々謀計ヲ回ラシ関八州ノ軍勢ヲ催促シテ其勢都合八萬騎天文十二年卯九月廿六日河越ノ城ニ押寄ケル河越ノ城ニハ氏康ノ家臣北条左衛門太夫ト云者楯籠リ居ルカ此者東國無双ノ猛将ナレハ張良樊噲カ勇ミヲナシ義経楠カ奇計ヲ運ラシテ千変萬化ト戦ヒスレハ数度ノ合戦ニ一度モ不覚ヲ取ラス其度毎ニ打勝テ氏康無二ノ忠臣也敵ハ八萬餘騎ニテ城外ヲ稲麻竹葦ノ如ク取巻昼夜ヲ分タス攻タリケルニ左衛門大夫カ々ル彊将ナレハ事トモセス味方ハ僅ニ三千余騎ニテ利剣スルトク秘術ヲ盡シテ防キ戦ヒケル故難ナク数萬ノ寄手ヲ打破リテ蜘蛛ノ子ノ如クニ追散シケレハ寄手ハ多勢ナリト雖トモ一支モセスシテ乱レ散テ落行ケル茲ヲ以テ見レハ軍旅ハ勢ノ多小ニヨラス専ラ大将ノ智術軍配ニヨレリト古人モイヘリ敵キハ八萬余騎味方ハ都合取合セテ其勢僅ニ八千余騎ナレハ敵ノ多勢ニクラフレハ味方ハ十分一ノ軍兵ナルモ輙リ勝利ヲ得タルワ偏ニ左衛門大夫カ良策ニヨレリ是ニ依テ憲政□憤猶止ミカタク如何ニモシテ氏康ヲ計亡サント牙ヲ噛テ昼夜工夫ヲ回ラシケル様々謀計ヲメクラシテ度々押寄タレトモ一度トシテ勝利ナケレハ只士卒ヲ損亡スルノミニテ氏康ニハ次第ニ味方勢勝リテ武威誠ニ旭ノ昇リ玉フカ如ク諸軍靡キ随ヒテ後ハ数萬騎ト成リ茲ニ於テ憲政カ兵卒昨日マテ主君ト仰キシ憲政ナルモ今日ハ運ノ拙キヲ見限リ皆々心替シテ我モ〳〵ト氏康ニ降参ヲリナシタリケル氏康カタル強将ナレハ其勢勝リテ子ノ氏政ハ相州小田原ニ在城シ伊豆相模武蔵上総下総上野六ケ國ノ管領タリシ大家成故其威勢ニホコリ秀吉ニモ従サリシカハ秀吉大ニ怒ラレサラハ我行向テ攻討ヘシトテ天正十八年京都ヲ進発アリ斯ル大敵ナレハ秀吉此度ノ軍勢殊サラ大軍ヲ催サレテ相州箱根ノ砦ヲ攻破リ小田原ノ城ニトット攻寄ケレハ氏康モ様々秘術ヲ尽シテ防キケレトモ中々羽柴カ勇猛神策ニハ叶ヒ難ク降参ヲソセラレケル然ルヲ此降参只事ナラスト秀吉思ハレ慮々怒リツヨケレハ頭テ検使ヲ指向テ氏政ニ腹切セ首討取テ凱陣シ其首京都ニ登里獄門ニ掛ラレテ氏政ノ子氏輝モ一時ニ亡ヒテ国家ヲ失シ其跡領地六ケ国ヲ家康卿ニ賜ハリケレハ先祖早雲ヨリ繁昌ナリシ伊豆北条ト言シ大家モ立所ニ武運尽キ四代目氏政ニシテ父子共々天正十八年寅七月十一日一時ニ亡ヒ失スルハ是非モナカリシ次第也大藤左京亮武継モ詮方ナク天文五年我生国ラ立出テヨリ身ヲ依ハスヘキ便リモナク熟思ヒケルハ古ヘヨリ賢臣ハ二君ニ仕ヘス貞女ハ両夫ニマミヘストカヤ雖トモ我此度佞人ノ壬頭ニカタリ無實ノ罪ニ落入主人ニ見放サルタ事無念也願クハ今一度何

レノ主ニカ仕ヘテ此恥辱ヲ雪キ二度武門ヲ完キタランハ先祖ヘ対シテ追孝ナラント思ヒ運ラシケルニ関東ニ親戚ナク北条家一類ハ亡ヒ失テユカリナケレハ如何ハセント思ヒ煩ヒケルカヨシ〳〵近國ニ足ヲ止ンヨリハ西國ニ身ヲ潜メ時節ヲ待ンモノト思処ヲ廻ラシ夫ヨリ此西海道ヲ志シテソ下リ来ニケレ東海道ヲモ打過テ京都ニ上り諸國ノ安危ヲ見聞スルニ此時山門ノ徒日連宗ト闘争起リ洛中洛外騒動セシ折柄ナレハ都ニモ足ヲ止メカタク是ヨリ山陽道ニ押移リ安芸國萩原ト云処ニ暫シ止マリテ熟世ノ成行ヲ思ヒ見ルニ此時中國ニハ大内義隆周防山口ニ居城ヲ構ヘテ其勢強リ九州ノ武士迄モ大半大内家ノ武勇ニ押レテ幕下ニ属シケルヨシ聞ヘケレハ武継大ニ悦ヒ是我門ヲ開クヘキ時至レリト早々彼地ヘ趣キ宜敷手寄モアラハト大内家ニ奉公シ身ヲ立ンモノト思案ヲ定メ周防ノ國ニ来リ山口ノ片邊ナル在所ニ足ヲ止メ在宅シテ民間ツラナリケルト雖トモ北条家ノ勇士ニシテ武徳備リ才能衆ニ越タル士ナレハ諸人貴シ敬ヒケル此頃大内ノ武威日々月々ニ盛ニシテ日月ノ昇リ給カ如シ四方ノ国ヘ武威輝キケレハ武継折モアラハ何卒大内ニ願ヒ今家臣タラン事ヲ思フヨリ他事ナカリケレハヨリ〳〵府中ニ行向ヒテ家中ヘ出入シ交ルケルモ武継武勇ノ誉レアレハ家中ノ人々日々ニ交リ厚クソ成ニケル或時御近習ナリシ大内ノ家臣溝口左衛門丞知貞ト云ヘルヲ頼ミテ大内ノ家臣ニ列ラン事ヲ願ヒケル溝口聞テ左京亮日頃ノ行蹟殊ニ武勇ノ誉レ利発ヲ感シ人品骨柄諸人ニ勝レテ流石一方ノ大将トスルトモヲサ〳〵恥ヘキ者ナラスト思ヒ早々此由主人義隆ニ言上シタリケルカ此時足利将軍ノ武威ヤ薄カリケン諸國ノ諸士将軍ノ命令ニ従ハス己々カ武勇ニホコリ互ニ領地ヲ争ヒ世ノ中暫シモ穏カナラス諸國争乱止ム時ナク然ルヲ此時迄モ黒崎帆柱山ノ城主麻生重業ノ末葉末タ帆柱山ニ相続シテ有リカ時ノ将軍足利家ヘハ参勤セスシテ周防大内ノ旗下トナリ山口ニ三年交代参府致セシモ九州ノ武士末タ大内ニ属セサルモ有ツル世ニケレハ義隆溝口カ言葉ヲ聞レ是幸ヒノ事也左京亮ヲ召出サレ新地貳百石ヲ宛行ヒテ家臣ノ列ニソ入レケル左京亮ハ面目身ニ余リ是ト申モ偏ニ溝口氏ノ取成ノ宜敷ニ依テト是ヨリ溝口ヲ親分ト頼ミテ厚ク恩賞シテ昼夜誠心ヲ砕キ忠義全ク仕ヘケレハ主君義隆甚タ喜悦有テ上ナク寵愛セラレケルトナシ然ルヲ盛者必衰ハ世ノ習ヒ斯ル大内家ノ盛ンナルモ時成故命成哉武運立所ニ傾キテ天文二十年恨ムラクハ家臣陶尾張守全姜トイフ逆臣ノ為ニ義隆ヤミ〳〵ト殺ラレケル社是非モ無カリシ次第ナレ斯リ大内家忽チ滅亡ニ及ヒシカハ左京亮モ如何スヘキ様ナク又モ浪々ノ身ト成シカハ周防山口ニモ止リ難ク天文廿一年又々山口ヲ立出九州指テソ下リケル下関ヨリ船路ヲ渡リ當國若松浦ニ漂着セシモ此里ィマタ此時迄ハ海中干潟ニシテ民家迎モナク松ナト処々ニ立ルノミ也栖トスヘキ地ニ非ストテ（此里ニ修多羅村ヨリ民家三軒作リ出ショリ追々諸人遠近ヨリ来リ住テ追々家造等ヲ重テ後ニ今ノ如クニハ成ニケル夫故世上ニハ今ニモ修多羅ノ若松トイヘリ抑右三軒ハ修多羅ノ地ヨリ作リ出シテ同村白山宮ノ氏子ト成リシカ其後廿六軒ト成シモ次第ニ人家繁昌シテ後々諸方ヨリ来リ集リテ民家多ク成ニタレハ二嶋社家伊髙氏別家シテ若松村ノ社職トナレリ己カ髙祖父参河守トイヘル人ノ代別家シテ日向トイヘル人修多羅氏子ト後ニ出来シ若松産子トノ争論起リケル事トモ我家ノ記ニ見エタリ去トモ日向ハ彼地ニ居住シ所ノ者ニ朝暮ヨリ交リテ産子ノ親シミ深ケレハ両氏子ノ者共伊髙ニ属シケルモ参河守ハ一里ノ間ヲ隔テ折々出勤セシ若松ナレハ氏子ノ交リ薄ク親シミ日向ニハ遥ニ遠サカリケハ此時ノ争論両氏子共々日向ニ味方セシ故是非ナク廿六軒モ此時ヨリ伊髙氏カ産子トハ也ニケル　左京亮此処ニモ足ヲ止ムヘキヨシナケレハ是ナル里藤木村ニソ来ラレケル此里迎モ此時迄ハ藤木村テフ村号ナク此所ヲ山本村トカヤ言テ人家少ク山ノ片原ニ田畠イサヤカ有テ民家是ニ便リ今枝村ナル古前ヨリ山ノ堂ト言フ所ニ民家四五軒立リ

以下次号

註

藤木白山神社は神主常駐で山手通り白山神社は行事の時だけ出張していた。

善光寺の五輪塔

八幡東区　黒野　肇

五輪塔は竹葉山善光寺の境内に所在する。善光寺は枝光北山（八幡東区日の出一丁目）にある観音堂で境内に大公孫樹と大紅葉があったが大紅葉（廻り三尺五寸）は明治四十年に枯れ　大公孫樹も戦時中落雷によって焼失した。枝光村当時は堂守も居らず淋しい観音堂であったが、明治三十三年熊本県人有動龍円和尚が岡山県小豆島より来り初代の堂守となり現在は四代目の村田俊賢氏が住職を継でいる。

言い傳へによると「大焚利の廃址で、花の尾城主麻生下野守重業の菩醍寺であったが或る時炎上して其のまゝ廃寺となり、麻生家の滅亡によって再建されることもなかったという。今五輪塔石が所々に発見される。」観音堂が何時建立されたか年代は明らかでない。

五輪塔は境内の整備により再三移動し、現在は境内の東南隅に最大の五輪塔を中心とし東側に二基南側に四基をL字状に配置している。各輪は適当に組合せて七基にまとめているため石質の違ったものが組合されており造立当時の状態を示すものではない。現在残っているものは空風輪七、火輪七、水輪七、地輪一である。まだ多数存在したそうであるがそれらは処分したそうである。向って左より仮に一号、二号と番号を附したが、一号の空風輪、火輪は砂岩製で水輪は花崗岩製に組合されてをり、二号の空風輪、火輪は花崗岩、水輪は砂岩となっている。又七号は地輪が砂岩でその他の各輪は石灰岩製でセメントで接着している。

空風輪、火輪、水輪の四方に梵字を陰刻したものが見られる。五輪塔には各輪四方に五輪の四転を示す梵字を配するものも多くあり善光寺の五輪塔もこれに類するものである。

五輪塔造立の年代であるが、一個残っている地輪はたがい立方形をなしてをり、水輪には正円形に近い形状のものが見られることよ

り鎌倉中期より室町時代に造立されたものと思われる。

花尾城主麻生下野守重業の菩醍寺については資料がない。五輪塔と結びつけた傳承であろう。

五輪塔の各輪の実測は第一表に石質については二表に示した。

下の表の1～7の番号は写真左よりの順番です。

番号		1	2	3	4	5	6	7
空風輪	高さ	18	24	19	19.5	28	17	13
	空輪径	14	17	13	14	20	12	11
	風輪径	14	18	13	16.5	21	13	12
火輪	高さ	16	16	22	18	17.5	18	12
	長さ	26	26	27	27	29	29	21
水輪	高さ	25	28	36	25	28	21	20
	最大径	28	29	35	27	34	23	19
地輪	高さ							24
	巾	欠	欠	欠	欠	欠	欠	22
	長							27

表1. 五輪計測表　単位cm

番号	1	2	3	4	5	6	7
空風輪	砂岩	花崗岩風空輪に梵字	砂岩空輪に梵字	花崗岩・空輪輪に風梵字	花崗岩	砂岩	石灰岩
火輪	花崗岩	砂岩梵字	砂岩	花崗岩	花崗画梵字	砂岩	石灰岩
水輪	砂岩	花崗岩	砂岩梵字	花崗岩梵字	花崗岩梵字	砂岩	石灰岩
地輪	欠	欠	欠	欠	欠	欠	砂岩

表2. 石質・梵字

福間松のいわれ

門司区　大田　章

門司区大里本町一丁目に、柳浦山西生寺と云う、康正二年（一四五六）開基の古い西山浄土宗の寺院がある。江戸時代は企救郡における宗門改めの踏絵寺（判行寺）として有名な寺で、幕末慶応丙寅（二年）の御変動で、惜しくも長州奇兵隊の兵火にかゝり、明治十六年（一八八三）再建された由緒ある寺で、山門を入ってすぐ東側墓地の一角に、古びた『福間松』の碑が建っている。これについて簡単に由緒を述べることにする。

福間松の碑は、福間彦右衛門元明九世の孫政方が、元明の武勲を表わすために、元明戦死の大里の浜に建立したものである。福間家は清和源氏の末流で、先祖が紀州（和歌山県）の福万村に住んで居たので、その土地の名をとって福万と名乗り、後に福間に変えている。

元明は天文八年（一五三九）に生まれ、十六歳の時、芸州吉田（広島県）の毛利元就のお側元に勤めていて手柄を立てたのを始め、度々の合戦で武名を掲げ、尼子氏の勇将山中鹿介（鹿之助）を討ち取ったことは有名である。

天正十四年（一五八六）豊臣秀吉の九州征伐に当り、毛利輝元は先陣にて赤間関（下関）に着陣、八月二十六日先鋒三浦兵庫頭は諸勢と共に大里の浜に上る。元明も亦軍監として渡海す。この時谷間の茂みより伏兵現れ、味方は不意をつかれて逃走す。元明一人踏み留まり決死の郎党数人をひきつれ敵中に斬り込み、十文字槍を振って奮戦中左足を鉄砲で撃たれながら、打ってかかる稲富羽右衛門を討ち取り立ち上る処に、大勢の敵兵折り重って元明を討つ、歴戦の猛将遂に最期をとぐ享年四十八歳。やがて味方も引き返し敵も去り、家人達は元明の遺骸を大里の浜に葬り松を植えて標とす。

この場所は寛保元年（一七四一）の福間家文書に「有馬中務大輔殿船屋敷ノ門前ニアリ、松ノ大サ四圍余村里及ヒ赤間ノ人能之ヲ知ル」とある。この船屋敷（通称久留米屋敷）は、大川の河口にあり、今の製粉会社の敷地に当る。

天明元年（一七八一）或は五年（一七八五）か、元明八世の孫政幸は当地に来て、元明の二百年忌法要を営み、其の子政方が松樹の傍に碑を建つ、碑文の終に、文化丙寅秋八月（文化三年一八〇六年）、